

# 特別編

## ムラサキ

盛留真悟

紅い宝石シリーズ

## ムラサキ

特別編



ALGI  
Products

光が沈んでいく。

ただ真っ暗な夢の底へ光が吸い寄せられ、そこには闇しか残らない。

夢は真っ暗から始まる。

落ち着いた中を静かに待っている。

自分はただ寝ているんだと暗示をかけているのに、暗闇を歩くうちに忘れてしまう。

たどり着いた場所、あるいは目覚めた場所なのだろうか。異様に明るい空、乾いた風、どこまでも続きそうな平原。昼寝でもしていたかのように寝ぼけている自分に気づく。

意識のはっきりしないまま、風間唯人は自分がどこにいるのか考えた。少なくとも、自分のもともという場所ではない。

そよぐ風は、唯人の赤紫の髪をなびかせた。深く紫に輝く唯人の髪は、緑と青に囲まれた風景の中で否応なしに目立っていた。

人の気配はあまりない。あたりにはだれもいないようだ。・・・ただ。

手元には手紙があった。寝起きの唯人にでもよく見える大きな字。

表には

『挑戦状！』

とあった。

ふざけている。日本でもなければ現代でもない場所に目覚め、誰もいない平原の真ん中で古風な手紙を手にしてている。

「・・・めんどい！」そうやって唯人は手紙を丸めようとした。

「待て！待てって！！」懐かしい声が聞こえた。あたりにはだれもいないようだったのに、突然姿を現した奴がいる。服装は青を基調とした迷彩。まるで特殊部隊のような格好。なんだ、浩平か。かくれんぼの天才、森野浩平。

「よ。」唯人はとりあえず返事だけした。そして、無造作に手紙を破ろうとした。

「とりあえず待て！」「あ。なに？これ？」「そう、これ」「なんなの？」

「『挑戦状！』って書いてあるじゃないか」「誰から？オマエ?!」「ちげーよ、よく読めよ。」

唯人はひとまず後ろを読んだ。「あ。」そこにはもうひとりの馴染みの人物の名前があった。

「よおし、いくべ。」「めんどいつつうの」「たまにはつきあえよ」

浩平は丘の向こうのちょびっとだけ頭を出している西洋風の城を指差した。

「お姫様がお待ちデース」

唯人はようやく、逃げ切れる相手ではないことを思い出した。逃げるほうがこの場合面倒くさい。しょうがないので、浩平についていくことにした。

丘を越えた先にはただ、城だけがあった。どこかのテーマパークあるような城とシルエットだけは似ているが、雰囲気はあんなにかわいくない。装飾が細かすぎてあんまり趣味ではなかった。あちこちとげとげしていて、要塞にも見える。実用的な城だった。

城の手前に大きな広場がある。むしろ、城と広場だけで充分なのだろう、挑戦状の主にとっては。

「ようこそ私の城へ！」2階建ての家くらいある門が開き、鞆を持った若い女性が現れた。幼い顔つきからは少女とも思える風貌だったが、自分の知りうる経歴からはとてもそんなはずはないのだと察していた。

若い女性。おしゃれで大きなメガネが目印の、自称「あっさりとしたインテリ美女」SAYURIである。浩平の彼女であり、発明家にしてアイテムマスター。時代と場所を選ばずに登場する細かいことは不明の人物。（謎という意味では3人ともお互い様ではある）

「どう？『挑戦状！』は読んだ？」自信満々に告げるSAYURI

「読んでない」唯人

「なんでー！！」SAYURIは登場のインパクトが薄い理由を悟った。挑戦状への興味は唯人にほとんどないのだ。

「しょうがないから連れて来た。説明は自分でしてくれ」浩平が事情を話した。唯人は説明書を読まないゲーマーなのだから。

「・・・仕方がないか。ひとまずこれを見て。SAYURIの自信作！！！」SAYURIが高らかに言うと、二人が嫌そうな顔をしながら門を見た。

「ガシュン。ガシュン。ガシュン。・・・」音は近づいてくる。

重々しい足音。金属製を思わせる響き。

二人は「あほか？」という顔で、ソレを見た。

「・・・」

「・・・」



「なに漫画みたいな無言文使ってるのさ」 SAYURIは呆けている二人に言った。・・・それに対し唯人は当然の権利として質問をした。「あのさあ、これと？」 「うん。これと」

「・・・」

「・・・」

「浩平までノらないの！」 SAYURIが怒ってみせても浩平だって困る。唯人はとりあえず『挑戦状！』を投げ捨てた。とっさにSAYURIは拾い、ゴミ袋のような物に投げ入れた。袋の中は変な音がする。

二人がやる気をのくすのも無理はない。そこには門とほぼ同じ大きさの、つまり2階建ての家くらいの甲冑を着た騎士がいたのだ。大きいし、鎧だし、騎士だし、二人ははやくもこの話を降りたかった。

よく見ると騎士は人ではなく機動兵器だった。ますますSAYURIの考えていることはわからない。

「スペックは今までの中型戦略人型兵器と一緒に。サイズは身長にすれば3分の1、大きさで言えば10分の1まで小さくできたの。唯人のいる世界の戦力に換算すると、空母の持つ総合力とどっこいてかんじかな？まあ、単騎だから、勝手は違うんだけどね。」

「ちょっと待て。」 浩平。「なに？」 SAYURI。

「そうだ。待て。」 唯人。「なに？」 SAYURI。

二人は声をそろえた「何に使うんだコレは！！」

「・・・なにして・・・番犬？」

これは番犬とかいうタイプのものじゃない。空母並みの戦力で家に侵入する奴がいるだろうか。まずいないだろう。SAYURIのいっていることがいまいちのみこめない。

「せっかくお城買ったし、騎士の一人くらいほしいじゃん？」

「え、この城私物？」 唯人が叫んだ。

まったくついていけない。だいたいここはどこなんだ。

「ここ？ここはゼランシアA03のとある地方。ちょっと前まで悪い王様が治めていた土地よ。悪政と激戦で人がよそへいっちゃって、そこへいろんな時空勢力が来たりイロイロあった挙句、私買ったの」

・・・つまり、ひと気のなくなった魔王城周辺の地上げに成功した奴がいてそいつから買った、と。SAYURIは絶対この世界の人間じゃないし、よその世界の人間が売買するようなものか？不動産で。

「それよりさ」 浩平がまた指差す。そこには唯人の髪とよく似た赤紫のメタリックな騎士が鈍く光っていた。

騎士はすでに構えている。いつでも来い！といった感じだ。SAYURIはまだ講釈をたれる。

「基本フレームは唯人の赤鬼をモデルにしていて、甲冑をつけた状態のシルエットがよく似せてある。駆動系は浩平の動きが参考になっていて、決まった動きならすばやく動ける。遠隔、搭乗によるコントロールはもちろん、無人でも動く優れもの！！」

優れものならなおさら厄介だ。唯人も浩平も帰りたかった。

「今日の挑戦はスペックの検証。歩いたり動いたりとはとくに確かめたけれど、対処能力は単体じゃ確かめられないからね」

「で、唯人が必要というわけか。」浩平は騎士と赤鬼の模擬戦をすでに想像している。

「なんつうか、それは無理だ」唯人が言った。「俺、自発的に赤鬼になれねーもん」

「ふふーん。SAYURIさまをなめてはいけませんよ」

SAYURIの手には酒瓶らしきものが握られていた。未成年者にはそれはいけない。

「卑怯だなあ」浩平はぼっそりつつぶやいた。SAYURIは軽く微笑んでいる。浩平はSAYURIを少し恐れた。

「それだけの自信があるのだよ。」SAYURIは怪しい笑みを浮かべた。

「まあまあ、そういわずに」コップを取り出し、SAYURIが注ごうとすると、背後で金属音が聞こえた。

「あぶない！！」そう叫ぶと、SAYURIを抱えた浩平が数メートル先で伏せている。声と同時に唯人は半歩横に移動し上体を反らしていた。酒瓶が斬れている。

騎士が動いていた。重そうな剣を振り下ろし、酒瓶を斬ったのだ。その事実は確かだった。だが、理由がわからない。

騎士は唯人を見据えていた。剣を構えなおし、まさに狙っている。無人でも動くといっていたが、命令を待つとかはしないのだろうか。

「さゆり！」唯人が呼ぶ。SAYURIはかばんから取り出していたリモコンの緊急停止スイッチらしきものをカチカチしている。

「全然だめっ」SAYURIはまるでテレビの調子が悪い程度の軽い悪態をついた。この人物は騎士が自発的に動いていることはあまり危険と感ぜないようだ。

危険。唯人は当たり前のようにそう感じた。何か意味はあるだろう。だが、今は危険。唯人の肌が桃色になり、筋肉が隆起した。いわゆるユイトプラスと呼ばれるちょっとした変身である。積極性、敏捷性、運動性が人間の限界まで引き出せる。

騎士はユイトプラスを確認すると、一步踏み出した。・・・剣が舞う。

騎士の剣さばきは速かった。一見、七メートル程度の騎士だが、性能は二十数メートルある人型機動兵器と変わらない。パワーもスピードも、尋常ではない。一太刀どころか何十太刀と短時間で振ってくる。第一、ユイトプラスとは大きさが違いすぎる。

浩平とSAYURIはなるべく遠くまで走った。唯人は二人とは反対側に跳び、騎士の射程距離ぎりぎりで駆け回った。

騎士の腕が八の字を描くようにびゅんと回る。一度でX字をつないで斬ることができる恐ろしい技だ。

ユイトプラスは必死に剣を避けながら、なんとか背中側に回ろうとしていた。どうやらそれは無理らしい。

開発者のSAYURIにどうにか止めてもらいたいのだが、今は死なないことで精一杯だ。刃に触れたら大怪我でもすまないだろう。自分のスタミナにも限界はあるし、早くなんとかしなくては。

だいたい、これに弱点はないのだろうか。注目したのはさっきからどうも回り込みたくて仕方のない背中側だ。操縦が内部からできるのなら、搭乗口は首のうしろあたりだろう。無理やり、中に入ればコントロール可能だろう。

ユイトプラスは背中へ回る決心をした。剣を避けるにも意味が出てきた。剣の動きにはパターンがある。決まった動きほど速いのなら、決まっていない動きにもって行けばいい。左右の動きから、急に前後の動きに変えた。

もう少しで届く！ユイトプラスが踏み込むと、剣の動きが重くなった。下がる腕、地面にどすどすと刃が刺さる。

・・・騎士が急停止した。

「あぶねー」浩平の声がする。ユイトプラスがよく見ると騎士の背中から浩平の足が出ている。無理やり突っ込んでいって上半身だけ埋まったようだ。



どうも、安心ができない。

騎士の件ではない。何か全体として不安が残る。この言い知れぬ不安は何だろう。

SAYURIは慌てて走ってくる「ごめんごめん」ごめんじゃないよ、もう。

浩平がつまみだされ、動きの止まった騎士にSAYURIが入ってなにかいじっている。ユイトプラスは騎士の顔を眺めた。先ほどは勝手に動き出し、唯人を相手にひととおり暴れて、浩平に止められた騎士。自分で動けるとはいえ、まさか、意味もなく斬りつけることはないだろう。騎士はまるで遠く雲のかなたでも眺めるかのように、顔が少し、上を向いている。煌めく兜の奥で、微かに瞳が光る。

ユイトプラスは気づいた。瞳の見つめる、その先に。

「浩平！さゆり！」唸るユイトプラス！反応するSAYURIと浩平。

ユイトプラスが騎士と同じ方向を見る。

「そういうことか……。さゆり、異常はないだろ」

「……そうみたい。でもこの子、雲とか見つめてるんだけど」

「操縦できるか？」「私には無理。サイズ合わせてない。でも」「でも、何？」

「自分専用があるんだよね」

「ええー！？」浩平はいやーな顔をした。

SAYURIが腕時計につぶやくと、城から4体の騎士が出てきた。2体が歩いていて、それぞれが1体ずつ抱えている。

『おまたせー』『持ってきたよー』

この声はひなちゃんとさゆちゃんだ。二人はSAYURIのカプセルキャラクターで、普段は浩平と唯人の護衛（実質は監視や追尾だ）をしているが、SAYURIの助手としても活躍している。

「早くしろ」ユイトプラスが怒鳴る。

『なに怒鳴ってるの？』

「お客さんだ！！」ユイトプラスは雲の彼方を見据えて、構えた。真っ赤に輝く腹、紅い宝石が輝いている。一気に体が大きくなる。

ユイトプラスは迫る悪意を強烈に感じ、怒った。その燃える体はさらに超人化し、ユイトツープラスというスーパーヒーローへと変貌した。いわゆる『赤鬼』である。

浩平が発した。「さゆり！急げ」そういつて、運ばれてきた騎士に飛び込む。迷わず、青紫の鎧に入った。

SAYURIはピンクに似た薄紫色の騎士に乗り込む。

赤鬼だけは騎士に乗り込まず、肩を並べた。

鮮やかなさまざまなムラサキの騎士たちが上空を見やった。雲を割り、黒い影が現れる。

どぶううん！

精度の低い光束の砲撃！

本気で時空戦艦だった。地上げがらみのやばい物件だ。横取りしようとして当たり前だ。

SAYURI、浩平、さゆちゃん、ひなちゃんが操縦桿を握り締める。

身構える騎士たち。

赤鬼が飛ぶと、最初の騎士も飛んだ。赤鬼と騎士、二体の赤紫の戦士が先陣を切った。  
城前の広場上空は戦場と化す。

すべて云うまでもない。

彼らは勝った。

城ばかりか、壊れはしたが大きな時空戦艦も手に入れ、SAYURIは満足の様子だ。

また、敵が来ても・・・きっと番犬たちが守ってくれる。気づけば吼えるだろう。

斬りつけてきたときは驚いたが、結局我々を促したのだ。メカにもいいところがある。いい騎士だ。

城の守りは騎士に任せ、唯人は用意された部屋に転がり込んだ。浩平が戦艦の中で手紙だかなんだかを見つけたとか言っていたが、もう聞く気力がない。どうせ、あの『挑戦状』だろう。

安心して、深い眠りについた。また、光が沈んでいく。

紅い宝石シリーズ 短編小説「ムラサキ」特別編

企画 アルジプロダクツ宝石企画室

原作 毬宇斎 悟達「紅い宝石」(パップU. C. Z)

構成 毬宇斎 我津 (パップU. C. Z)

画 娛誠粒 真一 (パップU. C. Z)

著作権管理 アルジプロダクツ

盛留真悟作品

※毬宇斎悟達、毬宇斎我津、娛誠粒真一は全て盛留真悟のペンネームです。それらの工房の総称をパップU. C. Zといたします。また、著作権管理にかかる個人事業の屋号をアルジプロダクツとしています。よって紅い宝石シリーズとムラサキのすべての著作権ならびに隣接する権利は盛留真悟が有することになります。

2010年7月9日 盛留真悟



**ALGI**  
Products